岩波講座　日本文學

金剛寺藏寶篋印陀羅尼を因由とする
平安朝時代の草假名と文學との關係

尾上八郎

岩波講座　日本文學

金剛寺藏寶篋印陀羅尼を因由とする平安朝時代の草假名と文學との關係

尾上八郎

岩波書店

金剛寺藏寶篋印陀羅尼を因由とする平安朝時代の草假名と文學との關係

尾上八郎

河内國天野の金剛寺藏の寶篋印陀羅尼經は、その紙面に、始めに消息があり、次に十三首の今様があり、その次に願文と和歌とがあり、又次に結緣文と和歌とがあり、最後に消息があり、經はその上に書かれてゐる。而して結緣文に「嘉應二年八月十五□　馳疎筆了安應聖人　寂末弟砂門寂眞」とある。これは、嘗て一部が國寶全集にも入れられたが、過般全部貴重圖書影本刊行會から發行せられた。

抑ゝ平安朝時代に書寫せられた數多の草假名の中で、書寫の年代の明らかなものは、誠に少ない。それは、藤原道長の筆の長保六年、及び寛弘八年の日記の中の短歌、藤原基俊筆の永久四年の和漢朗詠集、元永三年書寫の古今和歌集、同じく保安元年書寫の三寶繪詞、天治大治年間書寫の萬葉集、藤原伊行筆の永暦元年の和漢朗詠集がある。而して、寂眞の署名ある嘉應二年書寫の前述の一卷は、これに加はるべきである。故紙に經を書寫するのは、追福として有意義の事であつたのである。寂眞の遺墨が、これによつて吾人の目に觸れるのみでなく、嘉應附近にかゝる書體があつた事が明らかにせられるに到つたのは、至幸の事である。

寶篋印陀羅尼の草假名の書體は、それと同樣のものを見得ないので、明確にその類を定めることは出來ないのであるが、强ひて類似のものを求めて見ると、傳西行筆の後撰和歌集を書寫した斷片の白河切を見出すのである。筆勢の雄健なこと、處々に偏僻があつて雅馴ならざるところ、しかも、そこに多くの覇氣があり、また些かの俗習があるところ、ことにその特徴とも見るべき「耳」の字の長く且つ大きいのが、多く出て來るところは、よほどよく類似してゐる。

傳西行の筆は、内大臣家歌合、賀陽院水閣歌合、住吉歌合、郭公切、月輪切、出雲切、擧げ來れば頗る多いが、白河切もその一として重んぜられてゐる。しかし、西行といふ確證は殆んどない。消息は別として、その筆の草假名の儼として存在するものは、經裏懷紙のみである。それと白河切とは、もとより同樣でない。從つて、白河切の西行の筆たらざることは明らかであるが、しかし寶篋印陀羅尼の草假名の書寫せられた嘉應附近は、西行の現存の時代であるから、その筆蹟の間に、彼是一脈相通ずるもののあるのが、否み難いのは云ふまでもない。

白河切の書寫の年代はもとより不明であるが、長保年中の道長の草假名、及び元永三年の古今集等と比較すると、各の間に著しい差異を見出すであらう。道長の書寫の草假名は、數はもとより多くない。それで、全體を推すことは困難であると云へば云へないこともないが、使はれたそれだけによつても、自づから大體は捕捉し得られ、進んでは、當時の使用せられた書體の狀態を知ることが得られるのみでなく、更に公任の筆として確認せられてゐる北山抄との關係さへ知られるのである。

公任筆の北山抄は、達者な線で書かれてゐる。これは道長筆の日記が、僅かの草假名を包含しながら、漢字で書寫せられてゐるのと違つて、全然漢字で、草假名は一つも保有しないのであるから、その人の漢字は知られても、草假名は遂に知ることが出來ないのである。しかし、筆致筆觸は、漢字に於いても、草假名に於いても、大體情勢を異にしないのである。一を見れば、推して他をも知ることが出來る。たゞ精確を期することは、形態を異にしてゐるのであるから、理想的には出來難いのみであるが、それを除いては、大勢は歷々として指示し得るのである。これによつて見ると、道長の筆は、漢字の草體を離れることがあまり多くはなく、第一に、形體が獨草的で連綿の趣が乏しく、第二に、線條は優美であるが、淸爽の氣味が少なく、第三に、形態に崩れがあつて、整頓に缺けてゐるが、輕浮の氣

がなく沈著の風が著しい。道長と同時で、その下にゐた藤原行成は書家として名聲藉甚で、その逸話は數多殘され、その家も世尊寺流として後世に多大の影響を留めてゐるほどである。從つて、その筆の草假名といふものが多く傳はつてゐるが、いづれも信憑せられない。たゞ漢字と倂書した朗詠集の漢字が、信憑せられてゐるものと酷似してゐるところから推して、それと認定せられる程度であつて、確實なものは一も存しない。反對に漢字のみの方面では、行成の裔定信が認めて行成の眞と定めた白氏詩巻は誤のないものであらう。これを取つて、道長の書と比較すると、殆んど反對の現象が見られる。それは、旣に云ふが如く、草假名でないのであるから、精細な比較は出來ないのである。ことに、假名の特徵として見るべき連綿の趣の有無は論ぜられないのであるから、この事は除外して考へて見ると、第一に、線條が優美であつて、清爽の氣味が饒かである。第二に、形態が整頓して、著實といふよりも瀟灑の感が多い。第三に、線條にも變化が多く、細大の趣が故意的にも出來てゐる。全體に於いて、新意に滿ちてゐて、蒼古とか、沈鬱とかいふ感がなく、綺葩、優雅、纖麗等の新味ある語で言表すべき趣致を有つてゐる。この風は、すでに道風の眞筆として定信によつて認定せられた屛風土代に於いて、とくに有るところであり、また道風に次いだ佐理によつても、すでに繼承せられ、その眞筆である詩懷紙に於いて、よく發揮せられてゐるところである。であるから、行成によつて創始せられたのではないのであるが、この人になつて、始めて圓熟し、渾成し、擴張せられたのである。これによつて、漢字が支那趣味から全く離れ、純乎たる日本趣味を發揚することとなつたのである。この新樣式、新趣致は、當時の人々の懷抱してゐて、發露を求めてゐたところのものに、形を賦し、姿を與へたものである。このために、人々に歡迎せられ、賞贊せられ、從つて摸倣せられて、遂に大きな流をなしたのである。この事は遠い昔であるが、今日に於いても、十分に眼前にあるが如く推測し得るものである。公任は書に於いてよほど巧みであつた。しかし、

行成に壓せられて名聲がさほどになかつた、と古人は云つてゐる。これが事實であらう事は、その唯一の現存のものに於いて知られる。公任の流風は、道長のとは違ふが、その情趣に於いては、類似してゐる。乃ち、線條も雄健ではあるが新味が無く、形態も整頓してはゐるが、瀟灑の趣がない。道長の如く、古態といふべく、舊風と稱すべきものである。行成を讃美した當時の好尙とは、よほどの間隔が見えるやうである。公任の子の定賴は公任には及ばなかつたが、その時代に行成がすでに居なかつたので、書家として尊敬せられた、と古人はまた云つてゐる。定賴の眞筆といふものがまだ現はれないのであるから、その技倆のどのくらゐの程度であつたかは知られないのであるが、世間から相應な歡迎を受けたといふならば、猶行成の如き狀態の書風を持つたものではあるまいか。行成が世上を風靡した後に於いて、父の公任のやうな書體を有つて居たのでは、世の一顧をも買ひ得なかつたであらうから。

上述の情勢を眞であるとすると、道長と公任とは、著しく舊態を保守したものであり、行成はそれに反して、大いに新樣を發揮したものである。しかし、行成のは、すでに述べた如く、全然獨自的進出をした譯ではなく、その以前の道風の跡を逐ひ、佐理の後を襲うて、それの十分な發揚をしたものである。道風は羲之を宗とした當時の支那趣味の書體を脫却して、日本情趣を發揚した一種の書風を出したのである。勿論、これは道風のみではなく、天曆年中の善珠の寫經にあるが如く、その他にも同樣な趨勢をあらはしたものがあつたのであらうが、道風は一層その勢に乘じて、努力して、日本情趣の多いものを書き出したのである。この事は、道風の老後の消息の書體で知られる。乃ち、病臥中草卒の時には、自己の習得し來つた殆んど支那そのまゝの風を書いてゐるのである。佐理も、それを承けたのであるが、その人のは、すでに、殆んど日本風になつて、特に努力して、しかしたものとは思はれない。行成はこれを受けたのであるから、純然たる日本流で、純別の苦心なしで、すら〳〵と自己の發揮をよくしてゐる。それに、線

と形とに變化を加へ、姿態を作つて、時流の赴くところに隨伴したのであるから、新意は潑剌として紙上に躍ることとなつたのである。であるから、世上では、道長、公任らの舊傾向を保有するものよりも、行成の新流風を發揮するものを歡迎したのである。

しかし、道長、公任の古典的なのに對して、行成のは、全然反したものではない。舊樣に基礎を置きつゝ、新意を加へて行つたのである。道風がさうであつた。佐理もさうであつた。行成はそれに隨從したのであるから、その形態、線條には、猶多く義之の風を留めてゐる。たゞ、それを被ふのに、日本的意識を以てしたのである。であるから、これは、決して古典的とは云はれない。新の語を冠して、新古典的と云へば、云へるであらう。この事が承認せられるならば、古典的のものが、流布してゐる間に、新古典的のものが現はれて、時勢と合致して、その勢を旺にしたと云はれるであらう。

行成の新古典的傾向に、當時追隨者が多かつたことは、その傳說や、逸話によつて推知せられる。しかし、すべてがそれであつたとは云はれない。古典的傾向は、依然として命脈を保つてゐて、次の時期にも、なほ崇拜者を有してゐるのであつた。その事は、基俊の書寫の朗詠によつて知ることが出來る。すでに述べた如く、基俊は永久四年に朗詠集を點了してゐる。この書體は、從來基俊と傳へられてゐる新撰朗詠の斷片とも相通じてゐるものであるから、ともにその眞と考へられる。基俊は、歌に於いて古體を守つて、新樣に移らうとしなかつた。で、當時に於いて、新聲を揭げつゝあつた俊頼と拮抗した。この傾向は書に現はれて、その線條に一種の偏僻があつて、清爽の感が乏しく、形態に崩れが見えて、整頓に缺けてゐる。老實はあるが、道長のほどの高雅がないのは、その人によるのであらうしかし、全體に於いて、道長、公任の後を行つたものであつて、新傾向を加へないものであり、且つそのやうにと努力した

のであらう　かくの如きものは、たゞ業俊一人のみでなく、他にも多くあつたであらうが、業俊が歌壇に名聲があつたので、自然に殘つて今日に及んだのと見える。しかも、これらは、いづれも、線條も、形態も、崩れつゝ、亂れつつ、品位を墮しつゝ、情味を失ひつゝ下り來つたことも、承認せられねばならぬ。

古典的傾向に反して、新古典的のものは異なる變化を示した。道長の當時すでに、何事も下つてゆく世の末ではあるが、假名のみは進んで來た。その以前は、一樣式であつたのが、種々の變轉を示して異常な進展を示した、と源氏物語にも書かれてをるのであるが、それが一歩を進めて、元永、保安附近になると、驚くべき有樣を呈してゐる。本願寺藏の三十六人集は、その代表として、立派以上に立派なものである。

三十六人集の書體は、各集各人の書寫いはゆる寄合書であるので、各種各樣統一を見ないが、その線條と形態とから、大體に於いて類別して見ると、四種に限定し得る。乃ち、貫之上と、忠見、忠岑と、赤人との諸集は書體に差があるものは云ふまでもないが、先づ第一種とする。躬恒と遍照、賴基、敏行と信明とは、上述の狀況に於いて第二種、元眞、素性と、家持、能宣と、小大君、宗于と、伊勢、友則、齋宮と、高光、仲文と、興風、更に貫之下、順、中務と、重之、清正と、猿丸、是則、敦忠とは、同じく第三種、朝忠、公忠は別にして第四種とすることが出來る。この四種は、當時に儼として存してゐたものであるが、その貫之集上は、元永三年書寫の古今集と同筆であり、貫之集下、順、中務の三集は、金澤本萬葉集と同筆であると見える。家持集は元曆校本萬葉集の第十九卷と酷似してゐる。同筆であるであらう。

元曆校本萬葉集も、三十六人集中の家持集と同樣の筆致ある第十九卷を含んでゐるところから考へると、三十六人集と大體同時代の書寫と考へられる。これも三十六人集同樣、多人數の書寫、乃ち寄合書であるから、また當時の書

風の大體を知ることの便を有する。元來、この書者は、行成、公任、俊頼、寂蓮、光俊、宗尊親王の六人といはれてゐた。しかし、これの妄であることはいふまでもない。何となれば、時代的錯誤が甚しいからである。今これを檢討して見ると、第一、二卷が第一種、第四、十一、十二、十三、十七、十八、十九の各卷が第二種、第六卷が第三種、第七卷が第四種、第九、二十の兩卷が第五種、第十、十四の二卷が第五種、第十卷が第六種、第十四卷が第七種となるであらう。この中に於いて、三十六人集のと契合してゐるのはたゞ十九卷のみである。この中に、第六卷は後の補寫と考へられて、他と異なつて、著しく鎌倉時代の習氣を帶びてゐる。であるからこれを省いて考へてみると、三十六人集中に現はれなかつた各樣の書體が別に存してゐたことを、元暦校本萬葉集に於いて見ることが出來るのである。

類聚古集も、また寄合書である。これの第六卷から第八卷に到るものには、元暦校本萬葉集の第一、二卷と相通じるものがある。書寫の時代に多くの差がないであらう。しかし、第一卷から第五卷に到る間は、鎌倉風の習氣が強い。しかし、これを第一種とすると、第六、七、八卷は第二種となる。第十一卷から第十五卷に到るものは、また別體であるから、第三種となるであらう。第十六卷から第十八卷に到る間のものも、前同樣の意味に於いて、第四種となるであらう。第十七卷の中途から卷末に到るまでは、補寫であるから、それを省くと、これには四種の異筆を含んでゐるのであるが、それと他と契合してゐるものは、第六卷から第八卷までであつて、その外は皆他に同じ樣なものを有してゐない。これによつても、こゝにまた三十六人集に現はれなかつた各種の草體を見ることが出來るのである。

傳行成筆の草假名は各種各樣であるが、それらの中に、前述の三十六人集その他のものと、異なつたものを見る。その中で、和泉式部正續集の如きは、ことに奔放自由でありながら、品位の高さを保つてゐるが、あまりに變化を重んじて、傳公任筆の諸種と類し、また傳忠家、或は傳俊忠筆の各種とも通じてゐて、やゝ雅致を損したのさへあつて、

すべて、雜然として統一することの出來にくいものである。傳公任筆の草假名は書寫の年度不明のもののみで、眞に何の時代に屬せしむべきか疑はしいのであるが、糟色紙や、金澤本萬葉集の如きは、定信の筆と推定せられるから別として、その他は大體公任よりも下つて、元永、保安、或は少しくその以後に屬せしむべきものであらう。その中の太田切の如きは、著しく自由で、放縱で、常規を以て律すべからざるものがある。而して韻致がすこしく下つて居る。その他に於いても、猶その勢があつて、すべてが變轉を主とし、極力その發揮に努めてゐる如く見える。小大君の筆といふものも、またその仲間であつて、香紙切、御藏切等、皆變化の究極が目的となつてゐる。この勢が進んでは、傳忠家、俊忠の諸歌合切となつてゐる。忠家といふものは、まだ穩健の度が著しいが、俊忠といふのに到ると、線條に細大、形態に偏倚が多く、連綿の妙は極めてよく表現せられてゐるが、氣韻は更に下つてゐる。

　すべてに於いて、元永、保安附近、或は少しく以後に於いては、種々の書風があらはれて來たことが認められる。その諸體の中には、確かに舊傾向の全部ではなくとも、その幾分かを保持したものがあることが考へられる。乃ち三十六人集中の躬恒集の如きは、繼色紙などと相通じて、漢字の習氣の稍強いもので、行成と云はれてゐて、信憑するに足る比較的大字の朗詠集とは大いに趣を異にして、新意の乏しい一體である。かくの如きを一々擧げ來れば、確かに多いのであるが、それらを措いて他を通觀すると、多くは行成から盛となつたと考へられる新古典主義的傾向に基礎を置きながら、新から新に走つたものである。勿論その中には、邪路にさへ傾いたと思ふものもあるが、大體に於いて新味の生々としたものである。草假名としての妙味は窮められ、盡されて、その外に出ることが出來ない程度にまで進んでゐる。ことに、その線條に、力が十分にありながら、宛轉として凝滯するところがなく、形態に整頓はありながら、接續によつて巧みに變化してゐるところは、前にもなく、後にも見えないもので、草假名は實にこゝに於

いて極致に達してゐるのである。乃ち新古典主義が行き得るところまで行つたのである。しかし、傳公任筆及びその類のものは、以上では律せられない。その主とするところは連線の妙趣であり、發揮せむとしたものは變化の極致である。そのために、凡庸ならざらむとして奇僻にまで走り、趣致あらしめようとして俗流にまで落ちてゐる。しかし、變轉自在、奇趣横出して、籠を出た鳥、羈を離れた馬の如く、奔馳縱横なのは著しく浪漫的である。これはすでに古典主義的ではなく、また新古典主義的とも云はれない。云ひ得べくんば、浪漫主義的傾向とすべきであらう。而して、このものもまた到り得るところに近く到つてゐるやうに感じられる。

以上の兩傾向の外に、また別種の傾向の起つてゐることも見ねばならぬ。行成の子の行經に就いては、云はれるところが僅かしかなく、且つ確證のないものである。その子の伊房に到ると、すでに異風を現して居る。乃ち伊房は行成の跡を襲ふよりも、別に一種豪快な書風を作つた。その眞と考へられる前田家藏の北山抄は、承保三年八月の奥書があつて、伊房の筆たることが推知せられるのであるが、その形體は整齊、線條は勁健、しかもその線條には渾身の力が現はれてゐるやうである。これと類似したものに藍紙萬葉集があり、又前田家藏の十五番歌合がある。ことにその最後のものは、老蒼の趣が十分に加はつて、勁健剛强、まことに類の少ないものである。定信はその孫として現はれたが、直ちにそれのみを摸倣せず、流麗滑脫の風を加味した。であるから、勁健と流麗と、それに洒脫をも加へた一風を作り出した。ことに健筆を以て名のある人であるから、水の流れるが如く、風の過ぎるが如く書寫し去つたのである。そのため時に輕浮の感が起らざるを得ないが、外觀極めて變化が多く、才氣が饒かで、當時の好尙には適して十分なものがある。この故に、この流風はよほど行はれたらしく、その類のものが他にも存し、漢字方面でも寫經にも現はれてゐる。元暦校本萬葉集にも、やゝ傾向を同じうするものがある。

行成の流風が行はれつゝ、古典的傾向を壓倒したと思はれるのは概觀からであつて、その實は種々に變化したものが行はれつゝ、ことにそれに、他の思ひがけなかつた傾向さへも生じてゐるのである。その思ひがけなかつた傾向が、次第に生長して發展して、遂に次の時代に、豪强にして卑俗な風を拓くに到るのである。その現れはすでにあるが、明らかに藤原伊行の和漢朗詠集に於いて見ることが出來る。伊行のこの書寫の、永暦元年四月廿五日にあることは、その奥書によつて明らかであるが、その永暦元年は、元永、保安以後約四十年である。而して書者は定信の子であつて、しかも異なつた筆致をもつてゐる。乃ち、形態は修長であつて、筆路に淸爽味が少なく、細大が著しくつて、品位が全體に於いて墮ちて、すでに鎌倉時代の習氣を現はしてゐる。この風がいつしか繼承せられて、以後は大體その體で一貫するやうになつた。これは恰も、行成の流風が盛行を齎したと同樣に、その流風が當時の情勢と一致して、各人が翹望してゐるところを滿したのである。

道長以後藤原氏が衰へかゝつた。賴通も遂には志を得ず退隱の形さへ取つた。院政が始まるに及んでは、員に備はる公卿が多くなつた。それと共に裏面にのみあつた武人の勢力が表面に現はれて來た。それに先んじて豪强の氣は起つて、それを迎へるべき準備をなしてゐる。それの現れとして勁健の風が書體に見えて來た。たゞに優麗、たゞに姸美、底に多くの力を含んでは居るが、主として優麗姸美を主とした風はすでに全體を被ひ切れず、自づから變化を起して、縱横に奔馳する風、自在に變轉する體を持しながら、豪强勁健、居然として動かず、枯燥の線條、緊約の形態、當時の武將が大旆の下に踞坐するが如き狀態を呈せしめた。このものは上に述べた古典主義的とも新古典主義的とも云はれない。更に浪漫主義的でもない。その著しい點を捉へて、武强主義的とも云ひ得るであらう。

藤原忠通は、その筆の草假名が現存しないのであるから、そのいかなるものたるかを知る事は出來ない。しかし、

その消息、願文等から推して考へ、又その流風である後京極良經の筆と信ぜられるものから推して見ると、太い勁い線、緊まつた、隙のない形で、變轉の面白みよりも、居然として動かない態度を欲してゐると感じられる。この流風はすでに伊行の朗詠にも明らかなところであつて、世尊寺流の盛行の後に到つて、自づから世の歡迎を受けて流通したのである。この流の法性寺様は、この以後鎌倉時代にも及んで、賴朝や、實朝や、各武人間にも用ゐられて、武士的氣風に契合してゐる。これは武強主義の著しい現れといふべきである。

傳西行筆の白河切は、上述の武強主義的傾向の影響を受けて、行成以後盛行した新古典的流風が變化した時代の書寫であると思はれる。公卿趣味から武家趣味に變ずる間に出來て、麗しくありながら強く、輕く動きつゝ重きを欲する狀態を持つてゐる。從つて、それと類似してゐる嘉應二年の奥書ある寶篋印陀羅尼は、同じ情勢にあるべきものであらう。

以上云つたところは、散漫に失してゐるが、要約すれば、道長以前、乃ち寛弘時代以前から傳はり來つた道長の日記にあるが如き古典的傾向は、行成を主とした新古典的傾向によつて著しく變化せしめられた。その繼承者の猶あることは、永久年間の基俊の書寫でも明らかであるが、新流風には到底敵すべくもなかつた。而してその新古典的傾向は盛行したが、然し同じ處に留まることは出來なかつた。種々に變化し、樣々に曲折して、元永、保安附近の三十六人集中の諸種の如きに到つた。更にまた、元曆校本萬葉集、類聚古集中の諸種の如きにもなつた。また傳忠家、後忠筆の諸種ともなつた。この新古典主義的傾向に對して、傳公任筆の如き諸種も生じて、放縱自在、揮灑縱横で、浪漫主義的傾向も起つた。この交雜の間に、時勢の變ずるところ、公卿から武家に勢力が移つて行く前提として見るべく、永曆附近の伊房の筆と信ぜらるべき強健枯燥、意志の力を以て筆を遣る如き風も生じた。而してこの情態は、忠通に

及んでことに盛んで、武張主義的傾向とも云ふべきものが成つた。この變轉の間に、傳西行の白河切があり、寶篋印陀羅尼中の草假名があるのである。

假名が、國語を書寫する便利から始まつたのは云ふまでもない。主として漢字の楷體から片假名が起り、草體から草假名が生じたのも、また云ふに及ばない。これによつて、國語が完全に近く書寫せられたとともに、漢詩、漢文以外の試作の和歌が書かれ、和文が寫されることとなつた。これによつて、純然たる國文學が、吾々の目に觸れることとなつた。しかしてその楷體から來たものは、感情を重しとし、意志を輕しとした時代の趨勢には適合せず、草體から出たものが、社會生活に合致したところから、主として用ゐられて、殆んど何物もこれによつて書寫せられるに到つた。ことに和歌は、その優雅典麗な點がそれと吻合して間隙のないところから、大抵これにのみ據ることとなつた。從つて、草假名の發達は、自づから和歌の進展となり、和歌の隆盛は、草假名の進步を來すこととなつた。

平安朝では、和歌が殆んど文學の中核をなしてゐる。漢詩、漢文にも、その趣味が多く加はつてゐる、純乎たる國語から成る散文は、散文として成立はしてゐるが、韻文たる和歌を基礎としてゐる。和歌の連續が、おのづから散文の中心となつてゐる。

竹取、伊勢の事は措く。それは、それを書寫した當時の草假名が存在しないからである。それの關係するところのあるのは、土佐日記からである。土佐日記は、紀貫之が土佐から歸洛して後の作であるから、承平六年以後、天慶九年に到る十二年の間に於ける著作であらうが、恐らく歸洛後多くの時日を隔てない間に、作つたものであらう。これが藤原定家の臨摸によつて今日に傳はつてゐるのであるが、あまりの時代の隔りで、これは信憑するに足りないといふ人もあるが、その獨草の風、漢字の草體から發して、いまだいはゆる草假名化しない趣は、決して、後世人のよく

なし得るところではない。乃ち、草假名發達の初程にあるものとして見るより外に見方はないやうである。これに就いて、特に注意すべきは、その字體の獨草的であることである。これはおのづから、日記の文の、句が短く、單文の連續に止まり、聯構、重複の趣を作つてゐないのと一致してゐる。これから考へると、その前行の竹取、伊勢の諸物語も、この情態であるから、これは、それを襲うて多くの進展をしてゐないものと見える。從つて、もし竹取、伊勢の時代に書寫した草假名が存在したならば、必ず獨草的のものゝ連續に相違ないであらう。

しかし、貫之は、土佐日記以外に、古今和歌集序、大堰川行幸和歌序を作つてゐる。これは、何々いづれも長く、綿々として、前者と著しい差異を示してゐる。彼れの單純と異なつて複雜であり、朴質と比して富縟である。これに注意すべきは、その連續の趣致の著しく生じたことである。であるから、若しこれらの書寫が現存したならば、前者と異なつて、連綿の姿態のあるものであるであらう。これらの兩序は、貫之が漢文を本としての勞作であるから、飜譯的氣分が豐かで、貫之の眞面目といふには、未だしいものである。しかし、この氣分は、すでに貫之の有するものである。從つて、何處にかその發露が無ければならぬ。これに就いては、吾々は貫之の歌に回顧する必要がある。貫之のみではなく、その同時の躬恒や、忠岑や、友則や、是則や、その他の諸歌人の歌つたところは、奈良朝のものと異なるのは云ふまでもなく、その前期の業平、小町等のとも違つてゐる。暫見すれば、相違もないやうであるが、その自然に於ける取材の多いこと、技巧的であること、聲調の流麗であること、姿態に曲折あること、理窟的なこと、それに漢詩的趣味の少なくないこと、擧げ來れば頗る多い。乃ち貫之等は、古今和歌集の「今」の部に屬する多くの歌を創作したのである。これは、作者の古今和歌集序、大堰川行幸序に於ける態度と、共通したところである。

貫之の筆と云はれてゐる多くのものゝ中、高野切は有名ではあるが、筆者は今知られるところは三人から成つてゐ

て、そのいづれも筆致が全然相違してゐる。且つ孰れも朗詠集に、同一に近い筆者と見出すところを以て見ると、その人ではない事がわかる。その他の龜山切、寸松菴色紙なども信憑し難い。土佐日記以外に、たゞ一つ自家集切があるが、これも眞であるか否か、判定する資料がないので、如何ともし難いのであるが、その線條も、形態も、土佐日記の臨摸と類似したところが多く、漢字の草體を出て遠くないところは、ことに時代を遠くせずして書寫したものと思はれる。であるから、貫之であることは保し得ないが、その附近の能書者の所爲としてよからうと思ふ。しか考へてこれに對すると、土佐日記のそれよりも、多少なりとも各字が連關して、遊絲の趣に近くなつてゐ、從つて、線條にも、優麗の風が多くなつてゐるのが、上述の兩序とおのづから契合するやうである。

獨草の體がありながら連綿の風をもつてゐるものを、草假名發達の初程とし、土佐日記や自家集切をその類とすれば、道風の消息中の草假名は、まさにそれに次ぐべきものである。道風の眞は屛風土代に於いて見えるのであるが、その草假名はそれに存しない。從つて、その如何なるものであるかを知り得ないが、前述の消息中に、僅かにその面目を見ることが出來るのである。それは、道風の死去に近い時のものと、語句から想像せられるのであるから、康保三年附近のものであらう。その體が草體をあまり離れないことは、なほ土佐日記に見るところと類似してゐるが、各字の連續は少くなく、且つ巧みであることが、貫之の自家集切と似てゐて、しかも優つて居る。いはゆる草假名の領域に十分に這入つてゐる。乃ち、天暦附近では、承平附近と異なつて、草書の體から渾然たる草假名になつてゐることが考へられる。しかし道風の消息中の草假名と違つて、獨草の態を多く存して、堅實な書體を保ちながら、猶優美の趣を有つてゐるものに、佐理の筆かと考へられてゐる賀の歌切がある。これを佐理といふ事は、確實ではないが、書體から考へて、當時のものであらうとは信じられる。

貫之當時に於いて、二様の文學の趨勢を見ることが出來た。乃ち一は、純乎たる日本的のもの、二は、漢を我とした飜譯的のものである。しかして、前者は主として單文から成り、後者は主として複文から出來てゐた。この形勢は續いた。天暦附近では、前者とおなじものはすでにないが、それに多く優麗の分子が加はつて大和物語の類があり、後者と同じものはないが、その系統を以て目すべきものに蜻蛉日記や、宇津保物語の類がある。全然合致はしないが、その前者には、草假名として、傳佐理筆の賀の歌切を以て比してよからう。而して、後者には、道風の消息中の草假名を擬して差支はあるまいと思ふ。

　道風出で、佐理があらはれた時代の草假名は、すでに述べた如く純乎たる草假名として、連綿遊絲の趣を盡くしたものではない。その形の發展は、この次の時代からである。源氏物語に、舊様の教育を受け、舊態を保持して當時人たる源氏の笑を買つた末摘花の君の手を「中さだの筋」といひ、また「古きあと」と云つたのは、この頃の風を述べたとみえる。その特質を擧げて、「文字强う、中さだの筋にて、上下等しく書」くといひ、また「定まれるやうにはあれど、廣き心豐かならず、一筋に通ひてなむある」と云つてあるのは、變轉の妙がまだあらはれず、散布の興味が起らず、堅實着實を主とした事、猶漢字のそれの如き有様であるのを述べたのであらう。而して、これは寛弘時代の人の眼には、舊様、舊態で、すでに飽かざるところであつたのである。

　延喜期、天暦期が昔となつて、寛弘期に到ると、道長の草假名の如きが先づある。この事に就いては、前に述べた。それと公任とは共通したところが多いことも上に述べた。それと反して、行成の流風が現はれて、當時の情勢と一致して、盛行の基を啓いたことも述べた。

　寛弘時代には、從來盛行して思想的基礎、文學的根柢をなしてゐた漢文學が、全然消化せられて、純乎たる國文學

の皮となり、肉となり、血となつた。漢文の試作の續く事は從前の通であり、且つ多數になつたのであるが、それさへ殆んど日本的になり切つて、いはゆる和習を持つ作品が頭を揃へた。この事が、道長の日記中の書體と連關してゐる。漢ではあるが、すでに和が多い。義之から出た態度に、すでに崩れが見え、勁かつた線條に、早く優しみが現はれてゐる。公任の北山抄に於いても、また同樣の事が云へる。漢詩文と對すべき和歌に於いては、當時は流行の盛であつて、作家の輩出があり、從來少なくなかつた女流歌人がいよ〳〵多くなつた。形態は大體前代を襲つては居るが、その實は頗る異なつてゐる。先づ用語が異なつてゐる。前代の古今集の流風を逐うたのみでは、すでに當時の好尚に適すべくもない。語が異なれば、聲調が從つて異なる。たゞの主觀的傾向のみでは、時代の人々は滿足すべくもない。客觀的傾向を取つて、人事のみでなく、自然を諷歌することも要求せられた。この故に、範圍も擴げられ、着想の自由も生じた。すべてに於いて、今樣振が始まつた。これとともに、全體が平明になり、感情も、思想も、明瞭に表はされるやうになつた。これが追隨し易く見えるところから、摸倣者の多くも生じて、流行の範圍はます〳〵廣くなつた。この事は、よく行成の書風と共通してゐる。古體を擺脱して、近代色を豐かにして、姿態を優美にし、筆路を纖巧にし、適當な變轉と、曲折とを加へて、しかも擧ぢ易く、學び易く見えるところが、歌と契合してゐるのである。しかもまた、その歌が近代的でありながら、句法も、語法も、舊格に據つて、その範圍から、成るべく脫せざらむとし、また古歌の優秀なものは、つとめて基準として尊重して、それに違背せざらむとした。が、その語句は時に變改せしめて、解し易く、誦し易くしてはゐるが、それは、平明を欲し、淸淺を希ふから發したことである。これは、行成等の書の、形態の淵源するところが義之にあつて、古格、古體を學んでゐることの、歷々指點し得ると同樣である。これは乃ち古典主義的であるが、新字を冠して、新古典的傾向と稱すべきであらう。

和歌に於いて上述のやうであるとともに、物語に於いては一歩を進めてゐる。元來、散文は韻文に後れて發達したのであるが、長足の進歩をして、この時には、すでにそれよりも越えてゐる。支那を基本とした飜譯的態度も、また純日本的態度も、こゝには融合して一となり、眞の意味に於いて、發達の頂點にある散文がこゝに出來上つた。優麗と、典雅と、變轉と、韻致と、心理的觀察と、自然の描寫と悉く備はつて、國文として殆んど完美の域に達してゐる。これを從來の物語、日記に比ずれば、殆んど雲泥の差を示してゐる。しかし、そのものはもとより、全般的ではなくして、猶道長、公任の書そのものに等しい如きこと、和歌に於けると同樣であらう。源氏物語は、まさに行成の書と趣を一にし、著しく現代的趣味を發揚して遺憾なからしめたものであらう。しかも古格を離れず、舊規を等閑にせず、新法度を出さず、新手法を以てせず、更に周匝緻密、云ふべきは云ひ、述ぶべきは述べるところは、古典主義であつて、しかも新味が甚だ多い。從つて、新古典主義的傾向と稱すべきこと、和歌と同樣であるであらう。これまた、行成等の所業と比して忤はざるところである。前に述べた如く、源氏物語に、「よろづのこと昔には劣りざまにあしくなりゆく世の末なれど、かんなのみなむ今の世はいときはなくなりたる」と云ひ、又「妙にをかしきはとよりてこそ」と云つてゐるのは、これを指したのである。まことに文學とともに、書も眞の意味の隆盛期に達したのである。

行成と前後して現はれた曾根好忠や、和泉式部等は、必ずしも古格に據り、舊規を守らなかつた。情の赴くところ、意の趨るところ、思ふまゝに歌つた。狂惑の奴なりと、好忠は嘲けられた。また有名の歌人としても目せられざる場合もあつた。それはその歌ふところが、奔放であり、放縱であり、粗末であり、蕪雜であつたからである。しかし、その意氣の旺盛なことは、その間に十分にあらはれて、革新の思潮は汪然として湧き上つてゐる。和泉は、それほどでもないが、口にまかしてよくよまれる、と評せられたが如く、任意的で、創作的で、不羈であり、自由であつたの

である。前者も故意ではないかも知れぬが、その趣があり、後者は恐らく自然に發したのであらう。しかし、その歸着するところは一つで、ともに古典的でなく、更にその新を冠すべきでもなく、却つて浪漫主義的と云ふべきであらう。しかし、このものは行はれることが廣くなかつた。それはすでに云つた如く、好忠も重視せられず、和泉もその同輩の赤染衛門の新古典的なものよりも輕んぜられたので、明らかにされる。

和歌のみでなく、散文に於いても、如上の形勢がある。それは、今日は源氏物語と對するものとして重要視されてゐる枕草紙に於いて見える。このものは、好忠や、和泉式部の歌の如く、自由であり、不羈であり、古格や舊規よりは、自己の感情に適する手法を喜んだ。無理な言ひ方をもして平然としてゐる。それによつて、従來の文學以外の境地を拓いた處は、眞に前に古人の無い有様である。これは、當時の人の多く好まざるところであつた。源氏を云ふものは多くして、枕草子を說くものは、殆んど聞かれないことは、好忠、和泉よりも甚しい。しかし、それとともに、これは浪漫主義に立脚せるものとして、解釋すべきである。

傳公任筆の諸歌切、及び朗詠切の、すでに新古典主義的ではなく、却つて浪漫主義に依據してゐるであらうことを、すでに述べた。これらは、全くこの時期のものではなく、すこしく下つた院政附近のものかも知れぬが、その淵源するところは、この邊にあるであらう。傳公任筆の中の、太田切と稱する朗詠集切は、その漢字に於いては、行成等のそれとおなじく謹厚であり、整齊であつて、しかも情趣の多いものであるが、その草假名は意のまゝ、心のまゝに揮灑したもので、偏僻もあるが、放縱自由であつて、端倪することも出來ぬ程度である。乃ち、漢字は、確かに新古典主義的であるが、草假名は著しく浪漫主義である。これを眞とすれば、このものは、兩主義の混交の際に出來たものか、或は特に兩主義を持した何人かの所爲と解しなければならぬ。しかし、一人で、故意に兩傾向を統一なしに表現

せしめようとすることは、有るべく思はれない。恐らく、これは兩主義の一つがすでにあり、他が次いで起る時の人の作品と見るべきであらう。しかし、かくの如きものは、他になく、たゞこれ一のみであるから、強く言ふことは出來ぬが、よく兩傾向の混交狀態を呈はして、興味の深いものと思ふ。以上のやうなものもあるが、畢竟古典的のものは衰へ、新古典主義的のものが行はれ、浪漫的のものもあるにはあるが、勢を得ずして、院政時代に到るものと見える。

院政時代は、すでに述べた如く、藤原氏の力が衰へ、院政が始まり、次いで公卿の時代が去つて、武家の起る時である。從來の文化はこゝで爛熟の極に達し、その缺陷をもあらはすに到つた。前代に盛行した和歌は、語の清新、意の自由を欲して、前代に次いだのであるが、すでに舊慣に遠つたところが多いので、それに反抗する人も生じた。勅撰集は、その勅撰といふところから時人が尊重するものであつて、從來は嘗て非難の語を發するものもなかつたが、この時には、批議の書さへ出來るに到つた。しかし、この形勢はいよ／＼進んで、俊頼が出るやうになると、才思の發湧するに任せ、險難の語も、卑俗の辭も雜出せしめて、意義の晦澁も顧みず、新意あれば必ず就くこととした。この故に、散木奇歌集の中には、解し難いものもあるが、人の意表に出るものが多い。しかし、從來の客觀的傾向をして、發展し得るだけ發展せしめた。これは、舊傾向を保持する人の堪ふるところではない。基俊は、盛んにこの無學無法を述べて、歌は俊頼に損ぜられる、と云つて非難した。しかし、世間はすでに新に走つて、舊に黨しなかつたから、俊頼の流は行はれて、基俊の風は微にして振はなかつた。基俊の草假名の古典主義的であつたことは、前に述べた。これは、まさにその歌に對する態度とよく一致してゐる。俊頼の筆といふものはあつても、信憑し難い。しかし、三十六人集中の中の新傾向である諸種、また元暦校本萬葉集その他にあるそれらの諸種、傳行成、時には傳公任等筆

の諸種の中のものによつて見ると、奇趣横出して、變轉自在であつて、新古典主義に基礎は置きながら、浪漫主義にさへ傾いてゐるのが著しい。俊頼の一派のものは、まさにこれと比して齟齬のないものであらう。

舊傾向と新傾向と相爭つてゐる間に、顯輔等の一派も出た。これは、舊新の中間を行つたものとも考へられるが、時代が舊様に黨しないところから、猶新様に傾いた。その三派の交雜は遂に統一を起さしめた。俊成の流はそれである。新様でありながら舊格を棄てず、人事に卽しつゝ自然にも回顧し、主觀と客觀と併せ兼ねて、しかも、また難解の句なく、嶮怪の語なく、平易であつて追隨し易いこと、恰も行成の書の如きものがある。しかもまた、その中に流麗でありながら遒勁の風が著しく、果敢の氣が強くて放膽的なところもある。ことに舊來の語格によらない壓縮的句いはゆる秀句を一首の中心とした處は、ことに注意すべきものである。

行成の流風は伊房に變じて、勁健となつた。定信はそれを受けて、多くの流麗を加へたが、猶遒勁に於いて著しい。而して、それに多くの覇氣を加へて、忠通の風が生じた。とともに白河切のやうなものも出來、寶篋印陀羅尼の草假名のやうなものも、伊行の朗詠集のやうなものも出來た。これは、まさに顯輔等から俊成に到る道程にあるものである。

散文も、和歌と大體同じ經路を取つて居る。新古典主義の繼承がつゞく。榮花物語、さごろもの如きは、源氏の摸倣に過ぎない。その他の物語の存在が少ないので、多く云ふことは出來ないが、濱松中納言の如きは、その範疇を脫しようとして、やゝ浪漫的の匂があるが、猶出づることが多くない。これと反して大鏡に到り、今昔物語に到ると、語は質實であり、句は簡勁であり、從來の周匝縝密に反して、要領を摑んで、他は悉く棄却して顧みない風がある。乃ち、すでに意志的であつて感情的でない。武強主義の語を以て被ひ去つて可なるものであらう。この新古典主義の

變化したものは、傳俊賴筆の諸歌切にも相當するであらうし、この武强主義的のものは、忠通等のと、一致するであらう。

今傳はる顯輔の子清輔の筆の眞である古今集は、著しく簡勁であるとともに、俊成の確實と考へられるものは、甚しく遒勁である。枯枝の嵯峨たるが如きは、向ふ者の眼を痛ましめねば止まないほどである。これは、この人の性癖の致すところで、當時の書が悉く此くの如くであつたのではないが、武强主義の現れの、すべてに於いて著しいことは認めねばならぬ。これは、當時の和歌とまた散文と契合して、殆んど些の間隙を示さないものである。

畢竟、古典主義が先づあり、新古典主義が次ぎ、その盛行の傍ら浪漫主義が生じ、更にそれらを壓して武强主義が起つた。草假名と文學とは、それとともに變移した。その武强主義の興起した際に、金剛寺藏寶篋印陀羅尼は出來たのである。從つて、これの影響を多分に有つてゐるのである。氣韻はやゝ下るが、それは書の絶對價値から見た事である。時代によつた關係的價値は頗る高いものである。この一卷を因由として、平安朝の文學と草假名の關係が、その年號の明記によつて考察せられること、大體以上の如くである。が自分の云つたところは草急で、粗漏で、精細でない。更に筆を改めて細説する時があるのを待つてゐる。（完）

昭和七年十月十日印刷
昭和七年十月十五日發行

岩波講座 日本文學 第十七回配本

版權所有

編輯兼發行印刷者 東京市神田區一ツ橋通 岩波茂雄

印刷所 東京市神田區錦町 精興社

大森製本

發行所 東京神田一ツ橋通 岩波書店

Onoe, Hachiro
Kongoji zo
hokyoin darani